

## ■第5章－概説その2■

757年の「摂津職解」(せつつしきげ)によると、造東大寺司(ぞうとうだいじし)から摂津職を通じて、四天王寺と梶原寺(かじわらでら)に2万枚の瓦が発注されており、奈良時代後期の四天王寺は、中央寺院の瓦の大量発注に対応できる造瓦所(ぞうがしょ)を所有していたことがわかります。

そのような奈良時代後期の四天王寺と同範(どうはん)の瓦は、由義寺(ゆげでら)で出土していません。

由義寺は、続日本紀(しよくにほんぎ)にある称徳天皇と道鏡(どうきょう)によって整備された寺です。

道鏡は、現在の大阪府八尾市東弓削(ゆげ)周辺を拠点にした弓削氏の出身でした。

称徳天皇は、弓削氏の氏寺を「由義寺」と名を変えて改築し、官寺として整備しました。

769年、由義宮を西京とし、河内国が河内職(かわちしき)に格上げされました。

翌年には、由義寺の塔の造営に携わった人々に位階が与えられているので、この頃には立派な七重塔が完成していたとみられます。

由義寺からは、四天王寺と同範の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦だけでなく、称徳天皇ゆかりの西大寺系の瓦や河内地域の瓦など、多種多様な瓦が使用されています。

そのような広域の瓦の供給には、造由義大宮司を兼任した摂津職と河内職の亮(すけ)の働きがあったと考えられます。亮とは役所の次官のことです。

また、由義寺と四天王寺の同範瓦の大元になっているのは、大阪府豊中市にある金寺山廃寺(かなでらやまはいじ)の軒丸瓦です。

金寺山廃寺の軒丸瓦は7世紀後半のもので、

大事にストックされた範は、半世紀以上の時間を経て由義寺のために使われたのです。